

膝の軟骨培養し移植

県内で初めて

国立病院機構甲府病院は、患者自身の膝軟骨を培養して損傷箇所に移植する手術「自家培養軟骨移植術」を導入した。自家培養軟骨移植術は再生医療の一つで、治療の難しかった広範囲に及ぶ軟骨の損傷に対応。手術後は膝の痛みが緩和し、スポーツへの復帰も期待できる。

〈斉藤裕介〉

同病院スポーツ・膝疾患治療センター長の落合聡司医師(44)の自家培養軟骨を損傷箇所に移植し、脛骨から採取した骨膜でふたをする。計2回の手術が必要。最初の手術で患者の膝関節から軟骨細胞を少量採取し、軟骨細胞とコラーゲンの一種「アテロコラーゲン」を混ぜて約4週間かけて500円

広範囲に対応

膝軟骨の欠損、剥離はスポー

ツや交通事故を原因に起きる。主流の外科治療は「骨軟骨移植法」で、膝関節のうち採取しても軽微な障害で済む部分から軟骨を骨ごとくりぬき、軟骨の欠けた場所に移植する方法。しかし、移植できる軟骨の量は限ら

患者の一人、日川高2年の渡辺秀作さん(17)は右膝軟骨に比較的大きなダメージを負い、自家培養軟骨を移植

国立甲府病院が導入

痛み緩和、スポーツ復帰も

玉大の自家培養

した。渡辺さんは「膝軟骨を損傷したことで」先のことが不安だった。手術後、勉強を頑張って大学に入って再びスポーツをしたいという気持ちが強くなった」と喜ぶ。落合医師は「自家培養軟骨移植術の導入は膝のけがを理由にスポーツを諦めようとしている人にも朗報となる」と話している。

自家培養軟骨移植術を受けた渡辺秀作さんとチーム体制で治療・手術をしている医師たち
＝国立病院機構甲府病院

れていて、「大きな病変への対応は難しかった」(落合医師)。一方、自家培養軟骨移植術は①広範囲の損傷(損傷面積4平方センチ以上)に対応②軟骨採取部のダメージが少ない③などメリットがあるという。手術から1年たつと、スポーツを再開でき



自家培養軟骨移植術の流れ

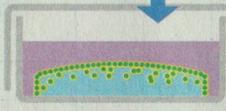
軟骨の一部を採取



軟骨組織



アテロコラーゲンゲル包埋培養(約4週間)



自家培養軟骨



培養軟骨を移植し、脛骨から採取した骨膜でふたをする



画像提供・J-TEC